

令和8年度特集展示(会期：令和8年7月14日(火)～令和8年11月15日(日))

典籍入門—古代史書編—

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 文献史学と典籍

文献史学は、様々な文字資料(史料)を掘り所として過去の事実を明らかにし、その歴史上の意義を研究します。典籍(書物)は二次的な史料とされますが、情報量が多く、体系的であるため、内容を十分に吟味すれば、貴重な情報源となります。典籍の中でも史書は、政権中枢の政治史に偏る傾向はあるものの、歴史の流れを把握するためには重要であり、文字資料が少ない古代史研究では必須の研究資源です。

このことを踏まえ、日本古代国家が編纂した史書について、写本の形態変化や、編纂のはじまり、後世の利用や研究について紹介する特集展示「典籍入門—古代史書編—」を開催します。

本展が、歴史研究における日本古代の史書の重要性と、史書から歴史的事実を読み取る研究方法などを御理解いただく機会となれば幸いです。



『丹鶴叢書本日本書紀』(模刻) 舍人親王等撰
近代・大正4年(1915)
原品：剣阿筆 鎌倉時代・嘉元4年(1306)
田中幸夫氏寄贈 九州歴史資料館所蔵

2 典籍のかたちと変化

『古事記』や『日本書紀』(以下「記紀」とも記す)の素材のうち、帝紀(天皇の系譜)は5世紀後半には文字化され、旧辞(神話や物語)も6世紀後半から7世紀前半までには文字化されたと推測されています。聖徳太子撰と伝える『法華義疏』など7世紀の紙の典籍が存在するので、記紀も紙に書かれていたのでしょうか。

記紀の原本は現存せず、写本が伝わります。9世紀前半書写の最古の『日本書紀』写本(田中本等)は卷子(巻物)です。卷子は途中や巻末を見たいときでも初めから広げる必要があって不便なので、卷子を初めから同じ幅に折り畳み、前後に表紙を付けた折本(帖装本)が作られました。さらに本文用紙の字面を中に折って重ねて、用紙の折り目の部分で糊付けした蝴蝶装(粘葉装)や、これを改良して、紙縫と糸で用紙を綴じ、本文用紙の字面を外表にして紙を重ね、袋綴じにした綫装本、用紙を数枚重ね合わせて谷折りにして、折り目に綴じ穴をあけて綴じ合わせたものを次々に綴じ繋いでゆく列帖装が生み出されました。

3 史書編纂のはじまり

『古事記』の序は、天武朝(672～686)以前に、帝紀(天皇の系譜)と旧辞(神話や物語)が編纂され、王族・氏族の家ごとに異なる内容の帝紀と旧辞が存在したと伝えています。また蘇我馬子と聖徳太子が編纂した天皇記と国記等、上宮王家(聖徳太子一族)の帝紀とみられる『上宮記』などもあったことが知られていますが、現存していません。

日本古代国家が編纂した現存最古の史書は、天武天皇が稗田阿礼を補佐として、異本の多い帝紀と旧辞の虚実を定め、これを太安万侶が編纂したと伝えられる『古事記』(712年成立)です。産霊の神の加護を受けて天皇が列島を統治してきたことを語ります。

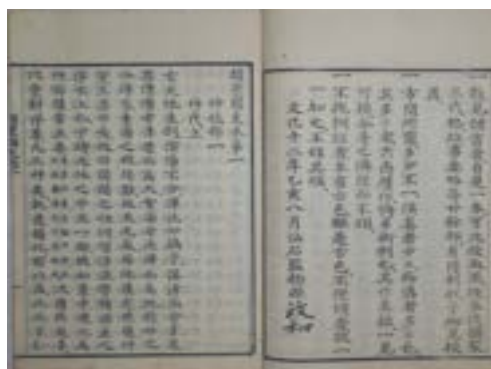
帝紀と旧辞は天皇の葬儀で誄(弔辞)としても読まれたので、『古事記』は、やまと言葉の読みを重視した和風漢文で書かれています。『日本書紀』(720年成立)は、年代不明の伝承にも年月日を付けて、中国の正史(政府の正式の史書)にならって正格(規則に従った正式な表現)の漢文で書かれました。陰と陽の創世の気を宿した天孫である歴代天皇が、自律的に列島を統治してきたとし、天皇の支配を正当化しました。

4 古代史書編纂の展開と利用

日本古代国家は、奈良時代から平安時代にかけて、中国にならって、政府の正式の史書である正史を編纂し続けました。それが『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』であり、あわせて六国史と呼ばれます。

中国の正史は本紀・列伝・表・志がありますが、日本では、本紀(皇帝の事績)にあたる天皇を中心とする編年体の記述のみで、その他は編纂されませんでした。高位の臣下が死去した際に、列伝にあたる伝記が掲載されるなど、中国の正史の本紀とも、皇帝一代の歴史を記す実録とも異なります。『続日本後紀』は仁明天皇一代の正史で、皇帝実録に近づいたため、以後は書名が、紀から実録に変化しました。『日本三代実録』の後、『新国史』編纂が続きましたが、完成せず、古代国家の正史編纂は断絶しました。

六国史は、政務や儀式の参考としても利用されました。宇多天皇の命を受けた菅原道真は、記事を検索するために便利のように、記事を細かな項目ごとに分類して列挙した『類聚国史』を編纂しました。



『類聚国史』 菅原道真撰 仙石政和校刊

寛平4年(892)成立 江戸時代・文化13年(1813)跋
九州歴史資料館所蔵

5 古代史書の研究

日本古代国家は、『日本書紀』完成後、平安時代前期に貴族・官人を対象に「日本紀講筵」(『日本書紀』の講義)を開催し、『日本書紀』に詳しい学識者を博士として、講義を中心に活発な議論が行われました。その記録である『日本紀私記』をはじめ、『風土記』や『大倭本紀』『上宮記』など、現在は失われた古典を数多く引用して、卜部兼方が編纂した『日本書紀』の注釈書が、『釈日本紀』です。鎌倉時代以前の『日本書紀』研究の状態を知る貴重な手がかりです。

江戸時代には『日本後紀』は写本が失われていました。このため、鴨祐之は『類聚国史』などの逸文をもとに復元研究を進め、『日本逸史』を編纂しました(後に写本の一部が発見されました)。

本居宣長は『古事記伝』を著して、『古事記』研究の水準と史書としての評価を飛躍的に高めました。河村秀根は『書紀集解』を著して、『日本書紀』編者が作文に使用した漢籍の出典を詳細に明らかにしました。

近代の文献史学の研究者は、西洋の歴史学とともに、江戸時代の研究も受け継ぎ、古代史書の研究方法を高度化し、現在も研究を進めています。

(学芸調査室 酒井芳司)



『釈日本紀』(複製) 卜部兼方撰 原品:鎌倉時代・正安3~4年(1301~2)

九州国立博物館所蔵 写真撮影:落合晴彦



『日本逸史』 鴨祐之撰 江戸時代・享保9年(1724)跋
18~19世紀 九州歴史資料館所蔵



編集 発行: 令和8年7月14日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <https://kyureki.jp/>